

道であり、真理であり、いのちであるイエス

ヨハネ福音書14:4-11

【新改訳 2017】

- 14:4 わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています。」
- 14:5 トマスはイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」
- 14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。
- 14:7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになります。今から父を知るので。いや、すでにあなたがたは父を見たのです。」
- 14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」
- 14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」
- 14:10 わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。
- 14:11 わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられると、わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい。

【祈りながら考えよう】

- (1) 「イエスが道である」とはどういう意味ですか。どうしてイエス以外に道はないのですか。
- (2) 「イエスが真理（本体）である」とはどういう意味ですか。
- (3) 「イエスがいのちである」とはどういう意味ですか。

【解説】

(1) 主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません

わたしがどこに行くのか、その道をあなたがたは知っています。」トマスはイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」(4-5節)

主イエスは天に行こうとしておられた。弟子たちは天の御父のみもとへ「行く道」を知っているはずであった。主が何度も弟子たちに話したことがあったからである。ところが、トマスはどうも主のことばが理解できていなかったようである。ペテロと同様に、地上のどこかへ旅に出ようとしておられる、と思っていた。

(2) わたしが道であり、真理であり、いのちなのです

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」(6節)

どんな預言者も教師も使徒も、どんな哲学者も、かつてこのようなことばを用いたことはなかった。これは、ご自身が神でなければ主張できない表現である。

①イエスが道 (ギリ)ホドス (ὁδός) / (英)way) である

主イエスは多くある道の1つということではない。イエスは唯一の道なのである。イエスを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできない。

主は、モーセのように単なる案内者、教師、律法付与者ではない。イエスご自身が門であり、道である。イエスを通して私たちは神に近づかなければならない。なぜか。

主は、私たちのために十字架で成し遂げられた神の義を満足させる贖いのみわざによって、アダムが墮落した時に閉じられてしまっていたいのちの木への道を開いてくださった。こういうわけで、イエスの血によって、私たちは父なる神のみもとに大胆に確信を持って近づくことができる (ヘブル10:19/エペソ3:12)。

②イエスが真理 (ギリ)アレセイア (ἀλήθεια) / (英)truth) である

主は「真理」である。主は単に真理を教えるお方ではない。ご自身が「真理」なのである。主は真理が姿をとったお方である。律法はモーセによって与えられたが、恵みと真理 (まこと) はイエス・キリストによって実現した (ヨハネ1:17)。真理であるお方は、人を罪の奴隷状態から自由にする (ヨハネ8:32)。

主が「わたしは真理である」と言われる時、その意味はこうである。「わたしは、旧約聖書が指し示すところの真のメシヤです。旧約聖書の儀式・犠牲が象徴し、影として表現されている「その本体 (reality/真実性)」です (コロサイ2:16-17)。

③イエスがいのち (ギリ)ゾーエ (ζωή) / (英)life) である

イエス・キリストは「いのち」である。主は霊的ないのちと永遠のいのちの両方の源泉である (Iヨハネ1:2-3)。

主を受け入れる人には永遠のいのちがある。ご自身がいのちであるからである。

この聖句の意味はこうである。「わたしは信仰の交わりにおけるいのちの源泉です。死からの救済者であり永遠のいのちの付与者です。わたしを知りわたしを信じる者は、どんなに自分を弱く無知だと感じていたとしても、今、霊的いのちを持っており、将来、父の家において栄光あるいのちを持つのです。」

④わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません

今日、多くの人は、どの宗教も結局最後に到達するのは、同じ神様であると考え。宗教はすべて何か良い点があるのだから、その宗教が最後にはみな天国へ導いてくれる、と教える。

しかし、主イエスは言われた。「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

主はなぜこれほどまでに狭い言い方をされたのか。それは、人は本質的に罪人であり、聖なる神に近づくには、イエス・キリストの十字架の贖いによるのでなければならぬからである。十戒を守ることによらず、黄金律を守ることによらず、儀式を行うことによらず、大教会の会員になることにもよらない。

貧しく無教養な人がいるかもしれない。しかし、主イエスへの信仰を持つなら、彼は救われる。富んでおり教養のある人がいるかもしれない。しかし、イエスの贖いに信頼しないならば、彼は滅びるしかない。

(3) すでにあなたがたは父を見たのです

あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになります。今から父を知るので。いや、すでにあなたがたは父を見たのです。」(7節)

主は改めて、ご自身と御父との間の神秘的な合一について教えられた。もし弟子たちにイエスの本当の姿がわかっていたら、「父をも知っていたはず」であった。主は、御父がどのようなお方であるかを人に示されたからである。

キリストの復活後には、弟子たちはイエスが神の御子であることを理解することになる。その時、キリストを知ることは御父を知ることであり、主イエスを見ることは神を見ることであった、とわかるはずであった。



この節は、神と主イエスが同一の方である、と教えているわけではない。神格には3つの明確な位格 (ペルソナ) があるが、神は唯一である (三位一体の意味)。

(4) わたしを見た人は、父を見たのです

ピリポはイエスに言った。「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。」(8-9節)

ピリポは、「父を見せてください。そうすれば満足します」と主に願った。彼には、主のすべて、みわざのすべて、ことばのすべてが御父の啓示である、ということがわかっていなかった。

イエスは忍耐強く彼の考えを正された。ピリポには主と「長い間」生活した経験があり、最初に召された弟子のひとりでもあった (ヨハネ1:43)。

しかし、キリストの神性という真理や、キリストと御父との一体性という真理が十分にわかっていなかった。イエスを見ても、「父」の完全な現れである方を見ていることに気づいていなかった。

(5) 信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい

わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられることを、信じていないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、自分から話しているものではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざを行っておられるのです。わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられると、わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい。(10-11節)

「わたしが父のうちにいて、父がわたしのうちにおられる」ということばは、父と御子との間の一体性がどれほど密接なものかを表している。御父と御子とは別の位格 (ペルソナ/人格、位格を表すラテン語) であるのに、その属性 (神の愛・聖・義など) とご意志においては1つである。

弟子たちはイエスが御父と1つであることを信じるべきであった。イエスご自身がそう証言しておられたからである。さもなければ、イエスが行われた「わざ」のゆえに「信じる」べきであった。